

リチャード・ジョーンズにおける歴史と理論

大野 精三郎

- I 問題の提起
- II ジョーンズの時代的背景と生涯
- III 『諸國民の経済學』の對象と構造
- IV 『諸國民の経済學』の基本理論とリカード批判
- V 結び——ジョーンズの問題視角と經濟發展觀

I

本稿における私の問題は、リカードの批判者として、また經濟の歴史的・理論的把握のゆえに、のちのマルクス經濟學の成立に重要な影響をあたえたリチャード・ジョーンズの『諸國民の經濟學』の問題對象・構造およびその基本理論を明らかにし、かれの理論と歴史把握との連關を明らかにすることを目的とする。

およそ個々の經濟學者を研究するにあいには、その學者の全著作を通じて、その學者がいかなる時代に生活し、いかなる經濟問題をみずからの問題とし、いかなる研究方法によってそれを解決しようと努力し、そして解決したかをあとずけてみなければならないことは當然なことであるが、このことはジョーンズについての従來の諸研究およびそれらの研究によってあたえられたジョーンズの學說史上の地位に照らして、改めて強調されなければならない。従來、ジョーンズは多くの經濟學者によってまったく無視されるか、あるいはリストとならんで歴史學派の先驅者と數えられたり¹⁾ またリカード學說のもっとも初期の・そしてもっとも體系的な批判者としての地位をあたえられる(イングラム²⁾)か、あるいはリカード以後の

1) F.Y. Edgeworth: Richard Jones in Dictionary of Political Economy edited by R. H. I. Palgrave. Vol. II. London 1900.

および Hans Weber: Richard Jones. Ein früher englischer Abtrünniger der klassischen Schule der Nationalökonomie. Zürcher Volkswirtschaftliche Forschungen herausgegeben von Prof. Dr. M. Saitzew. Band 30, Zürich 1939.

2) J. K. Ingram: A history of political economy. new and enlarged edition. London 1915.

經濟學が資本と労働の經濟學に分離・對立してゆくなかにならぬ『捉らわれざる研究者』の地位をあたえられる(カウツキー³⁾)か、または唯物史觀の先驅者ともみられていて(ヒルファーディング⁴⁾)、その學說史上の位置も、古典學派のスミス、リカード、マルサスのように一義的な地位をあたえられていない。このことは、ジョーンズの經濟學的著述が數少く、それらが稀觀本に屬すること、またかれがみずからの經濟學體系を完成することなく死んでしまったことにもとづくことがその原因の一つをなすにしても、その大部分は、ジョーンズについての諸研究が、かれの經濟學說の全體的研究を缺いたためによるといわなければならない。

したがってジョーンズの企圖した『諸國民の經濟學の』問題對象・構造およびその基本理論を全體的に把握することが不可缺の問題とならざるをえない。

II

そのまえに、われわれは、ジョーンズがいかなる時代に生き、いかなる生涯を送り、そしていかなる書物を書いたかを簡単にみておこう。

ジョーンズの時代、とくにかれが經濟學者として、また實務家として活動した 1830 年以降のイギリス社會は、資本主義が嵐と熱狂の産業革命期

3) Karl Marx: Theorien über den Mehrwert, herausgegeben von K. Kautzky, 5Auff. 1923

4) R. Hilferding: Aus der Vorgeschichte der Marxschen Ökonomie, 3. Richard Jones in Die Neue Zeit, Jahrgang 30, 1. Bd., No. 10. Stuttgart 1911.

を経て、全機構的に確立された時期であった。経済的には、『穀物條令』の廢止をめぐって、産業資本と貴族的土地所有の對立をはらみながらも、基本的には資本主義が確立し、恐慌がすでに規則正しい周期をもってはじまり、勞資の對立が脅威的な形態をとっていった時代であった。政治的には選舉法の改正によって資本家階級が土地貴族とならんで議會政治のうゑで發言權をもつようになった時代であるが、選舉資格をあたえられなかった勞働階級が選舉權を要求してたちあがり、チャーティズム運動が生成・發展していった時代であった。またこの時代は、このような経済的・政治的な事情を反映して、経済學の歴史のうゑでも種々の對立があらわれた時代であった。すなわち一方では、リカードの経済學が風靡し、それを祖述したマカロック、ジェイムズ・ミルなどのいわゆるリカード學派が生まれ、それとならんで古典派經濟學者のとらわれざる分析に代って、辯護論のやましい心ときたない意圖をもった俗流經濟學があらわれはじめていた。他方ではこのようなリカードおよび俗流經濟學に對立して、勞働はまたみずからの經濟學をもつに至った。それはイギリスのオーエン、フランスのフーリエおよびサン・シモンのユートピア社會主義などの要求にあらわれたが、とくに後代『リカード社會主義者』とよばれるひとたちは、オーエン的社會主義と結びついてリカード經濟學の遺産のうゑで現實社會の批判を開始しつつあった。そしてジョーンズの生涯の最後には、エンゲルスのいう科學的社會主義が、『共産黨宣言』によってその姿をあらわしはじめていた。

18世紀の最後の10年代に生まれ、産業革命の完成期に成長したジョーンズは、はじめイギリス國教會の牧師としての生活をふみだしたが、1820—30年代のイギリス農村における勞働者の暴動、とくにフランスの七月革命の影響をうけてケント、サセックスの諸州に發生した1830年の大規模な暴動を目撃し、勞働者階級の現状および將來という問題におもな關心を移し、それから經濟學者としての活動をおこなうに至った。1831年に『地代論』(An essay on the distribution of wealth and

the sources of taxation. Part I. Rent, London 1831.) を刊行し、その後ロンドンに新設されたキングス・カレッジ (King's College) の政治經濟學の教授に任命された。かれが同校でおこなった最初の講義は、勞賃についての講義要綱をつけ『政治經濟學序講、勞賃について連續講義要綱をふす』(An introductory lecture on the political economy delivered at King's College, London, 27th February, 1833. To which is added a syllabus of a course of 1 lecture on the wages of labour to be delivered at King's College, London, in the month of April, 1833. London 1833.) の表題のもとにロンドンで出版した。マルサスの死後一年、1835年にマルサスの後繼者として東インド・カレッジ (East India College) の經濟學および歴史學の教授に任命された。このような學問的活動とならんでジョーンズは、キングス・カレッジの教授時代から十分の一税を金納に改める法案の作成に協力していた。そのため學問的活動をさまたげられたが、1852年には『政治經濟學講義集』(Text-book of lectures on the political economy of nations delivered at the East India College, Haileybury. Hertford 1852) を刊行した。ジョーンズは教授の職を辭してまもなく、1855年死亡したが1831年主著『地代論』刊行以後死にいたるまでの論文・講義の概要およびそのほかの覺書は友人ウィリアム・ヒューエル (Whilliam Whewell) によって1859年『故リチャード・ジョーンズ遺稿集』(Literary remains, consisting of lectures and tracts on political economy, of the late Rev. Richard Jones. London 1859.) として出版された。われわれのもつジョーンズの著述は以上4冊である。これらが相互にいかなる關係をもつて、かれの經濟學の體系をかたちづくっているか。それが次節の課題となる。

III

われわれはすでに、ジョーンズが經濟學者としての活動をおこなうに至った機縁がイギリス農業勞働者の暴動にあることをみた。そしてこの勞働階級の現状および將來という問題こそ、かれの經濟學の課題であった。

労働階級の現状および将来という問題は、前世代にマルサスによって研究され、その研究によって確立された人口法則は、その当時の支配的な経済学説であったリカードの経済学の基礎となっていた。ジョーンズは、この問題を、マルサスのとりあつかったところより擴げ、労働者の所得、すなわち賃銀がいかにして決定されるかをみずからの研究テーマとする。このばあい注意しなければならないことは、労働者とはジョーンズにおいて歴史のはじめに見いだされると考えられた農奴・分益農、自作農、また當時のアジア、とくにインドにひろく見いだされた世襲的占有者から近代的賃銀労働者を含んでいることである。したがってまた當然『賃銀』は農奴から近代的な賃銀労働者までの、かれらのうけとる報酬を含んでいる。しかしかれはこの問題を狭く労働者の報酬の問題にかぎらず、廣く生産物の生産・分配の問題として展開しようとする。この問題を解くにあたってかれの用いた方法は、かれが大學生時代に學んだ自然科学、とくに天文学の方法から示唆をうけたものであった。すなわちかれは天文学における『觀察』は、経済学においても同様重要であることを強調し、経済学における觀察を助ける補助手段として二つの手段すなわち歴史と統計をあげる。かれは當時イギリス朝野に問題となりつつあったインドの土地所有關係を研究し、インド社會について知識を深めた。このイギリスとは異質的な社會についての知識は、イギリスの社會狀態を他のいっさいの社會の典型と考えるリカード経済学の狭い假定をすてさせる機縁となったことはのちに明らかにされてゆくであろう。

さて、農奴から近代労働者に至るまでの労働者の報酬、すなわちかれらによって消費される生活資料は労働基金をかたちづくっているが、それが種々の形態をもっていて、それが各國民の経済構造を規定するという見解からジョーンズは出發する。いいかえれば、ジョーンズは社會の全経済構造は『労働者』がかれらの生活資料を獲得する種々の形態すなわちマルサスのいう労働の形態を中心として廻轉するという基本的には正しい見解から出發している。この労働の形態は究極には労働者が

土地および生産手段にたいしてもつ種々の所有形態によって規定されているのであるが、これはジョーンズにおいてすでに暗黙の前提とされている。このように労働の形態から出發してジョーンズは諸國民の経済的構造を二つに大別する。『諸國民の経済構造という場合には、最初は土地の所有制度、すなわち土地の余剰生産物の分配によって確立され、しかものちに富の生産と交換とにおける・また労働人口を養い雇用することにおける・代理者である資本家の介入によって變種させられた種々の階級のあいだの諸關係を意味しているのである⁵⁾。』この余剰生産物は生産者である農民が自分自身と家族を養いしかも耕作を續けてゆくために、必要な量をのぞいたあとに残る土地生産物を意味している。土地の所有を基礎として諸階級のあいだにその生産物を分配することは、地球上の多くの地方に見いだされる諸國民の経済構造を直接に規定する。しかし資本主義的生産方法が支配的におこなわれている経済構造においては、土地所有が直接に諸階級のあいだの根本的な諸關係を規定することをやめる。このようにジョーンズは、『経済構造』の概念をもって、前資本主義的および資本主義的諸關係のすべてを説明しようとする。また『諸國民の経済的・社會的組織とそれらの生産力とのあいだには密接な關連がある。政治的・社會的・道德的および知的大變化は共同社會の経済組織の變化をともしなう。これらの變化は必然的に、それらの變化がおきる諸國民のなかに見いだされる種々の政治的・社會的要素に支配的な影響をおよぼす……共同社會がその生産力を變えるにつれて、それは必然的にその習慣をも變える⁶⁾。』

このような立場からジョーンズは單に資本主義社會を研究の對象とするばかりでなく、地球の大部分を占めている前資本主義的諸關係の支配する社會をも研究の對象とする経済学をもたなければならぬと考え、そのような経済学を『諸國民の経済学』(Political Economy of Nations)とよ

5) Jones: Introductory lecture. pp. 21—22. Whewell-Jones: Literary remains. p. 560.

6) Jones: Text-book. pp. 45—48. Whewell-Jones: ibid, pp. 405—411.

んだのである。そしてかれはこの二つの経済構造における富の分配の原理とその経済構造内部の社会的・政治的諸関係の把握をみずからの経済学の課題としたのである。

このようにしてイギリスの経済学は、スミス以後ジョーンズによってはじめてその歴史的構造分析においていちじるしく前進させられた。スミスはみずからの経済学の問題を諸国民の富(Wealth of Nations)としたが、かれのいう諸国民とは多数の国民を總括的にまた集合的に問題としたのではなく、かれはやはりその一つ一つの国民を別々に研究し、そのうえでそれらの多数を比較している。すなわち国民について『単數的差別のうえに複數的無差別な研究⁷⁾』がなされるにとどまったが、ジョーンズにおいてはそれが正當に経済構造の差異を示す複數的差別のうえにとりあげられるに至ったのである。

ジョーンズによれば、このような諸国民の経済構造の發展段階は二つの要因によって決定される。

すなわち(1)土地所有の諸形態とそれにもとづく地代の諸形態。(2)労働者を維持する労働基金の諸形態によってである。かれの未來のテーマである勤勞者の報酬すなわち賃銀は、前資本主義的経済構造においては土地所有によって決定的な影響をうける。『世界中の大多数の労働者(小農耕作者)によってうけとられる報酬の大きさに影響する諸原因の明確な理解は、かれらの支拂う種々の地代の形態と条件の考察のあとにはじめて得られるからである⁸⁾。』このような理由のために『諸国民の経済学』は順序として第一に地代を、第二に賃銀をとりあつかうことになる。

前資本主義的経済構造においては、すでに述べたように地代は餘剰生産物の形態をとってあらわれる。この地代をジョーンズは《小農地代 peasant rents》と名づけ、そのもとに《労働地代 labour rents》《分益農地代 metayer rents》《ライオット地代 ryot rents》《コツティヤー地代 cottier rents》などを分類している。またこ

の経済構造においては、労働基金は、農民が《みずから生みだす賃銀 self-produced wages》として、あるいは地主が農民から收取する餘剰生産物の支出、すなわち《収入 revenue》のかたちをとってあらわれる。この『地代』および労働基金の性質およびその大きさがいかにして決定されるかを究明することが、ジョーンズの前資本主義的経済構造の分析の中心問題である。そして資本主義的経済構造においてはじめて『資本』があらわれるが、これが地代と労働基金の性質と大きさをいかに變化させるか、總じて資本主義的経済構造内部における分配関係を究明することが、ジョーンズの資本主義的経済構造の分析の中心問題となっている。最後にこの二つの経済構造の區別のうえにたつて人口理論が展開される。労働者の報酬としての『賃銀』がいかにして決定されるかということをもつ『諸国民の経済学』は『賃銀』は労働基金の大きさと労働者数によって決定されるという命題をもっているからである。ジョーンズは『賃銀』の騰落が人口数の増減と直接的な関係があるというマルサスの人口法則を批判して、人口数の大きさを制限するものには、マルサスの指摘した『貧困 misery』『悪徳 vice』のほかに『自發的抑制 voluntary restraint』があると指摘する。『賃銀』は人間の存在に必要な第一次的な欲望をみたすほかに、快適な生活水準を享受するために、第二次的な欲望をみたすためにも用いられる。『労働者』階級が、この第二次的な欲望をみたすために自發的抑制をおこなうならば、『労働者』階級の『賃銀』の増加の利益は、ただちに人口数の増加によって失われまいであろう。このような『自發的抑制』をおこなう労働者階級の主体的・制度的要因が、前資本主義的経済構造と資本主義的経済構造のいずれに多いかという分析をおこない、人口法則のいわば歴史性を明らかにし、その側面から『労働者』階級の現状および將來を明らかにするという『諸国民の経済学』の最終の課題にこたえている。

ジョーンズは、このように描かれる諸国民の経済学を完成することなく死んだのであるが、われ

7) 大内兵衛『國民の富か 諸國民の富か=矢内原君に答へる』帝國大學新聞 1932年 833號

8) Jones: Rent. Preface XXV.

われはかれのいだいた構想から、かれの經濟學的著作をつぎのように位置づけることができよう。すなわち主著『地代論』は地代を、『序講』に附せられた『要綱』および『講義集』は労働基金および人口論をとりあつかい、『序講』はかれの經濟學の方法・任務を明らかにし、『遺稿集』は以上の補遺をしているほか、經濟構造内部における諸階級の政治的關係の分析をふくみ、かれの學説を補綴しているものとみることができよう。

以上のような構造をもつ諸國民の經濟學においてジョーンズは、それ自身問題の課題を當時支配的なリカード經濟學の批判の形で展開した。というのは『諸國民の經濟學』の究極の目標は、地主の利害は社會の總ての他の階級の利害とつねに相反することを明らかにしたリカード經濟學にたいして、二つの經濟構造のいずれをとっても、すなわち『土地所有者と耕作者との關係のいかなる形態ないし變化のもとにおいても、地主の恒久的利害は社會全體の利害に反しない⁹⁾』こと、したがって『社會のいかなる部分の利害も、いずれか他の部分の利害と永久的に相反するものでない¹⁰⁾』ことを論證することにあつた。このような目標は、ジョーンズが當時イギリス國內において、資本家と労働者との共同戦線による穀物條令の廢止運動に對抗して、地主の利益を擁護するとともに、土地貴族の子弟をもつて固められていた東インド會社のインドにおける地主的役割をも辯護するという役割をもつて登場したことを示すものである。したがって『諸國民の經濟學』は、スミス、リカードの經濟學と反對にいちじるしく地主的色彩の濃い特徴をもっている。

IV

すでに述べたように、ジョーンズは『諸國民の經濟學』の基本的構造をつらぬくみずからの理論的觀點を、獨立の體系として示さず、むしろリカード批判の形で展開している。『諸國民の經濟學』構造を明らかにしたわれわれは、リカード經濟學にたいする批判點をつぎのごとくに整理することができるであろう。

9) 10) Jones: Rent. preface XXXII, XXXIV.

かれのリカード批判は、第一に、リカードの理論が前資本主義的關係を説明しえないこと、あるいは地球上の多くの社會を支配している前資本主義的諸關係を説明する理論に缺けていることにあつた。その批判は、第二に、リカード理論が資本主義的經濟構造の内部の諸關係の説明において妥當しない所以を論證することにあつた。

第一の批判についていえば、この批判は、リカード學派からみればまったく『筋ちがい』のものであつたが、ジョーンズがこのことの論證のためになした分析によって、リカードはもとより、スミス以下の古典派經濟學者のとりあつかう地代・賃銀・資本などの經濟學的諸範疇がすぐれて歴史的な性質をもつことを明らかにする結果となつた。したがって、この批判から生まれた成果は、かれの經濟學的貢獻に數えてよいであろう。すなわちジョーンズの歴史認識は、リカード及びリカード學派にたいして、資本主義社會を歴史的に遅れてあらわれた一形態として正しく把握することができた。土地所有の形態からみた資本主義的土地所有形態を、リカードおよびリカード學派が土地所有の影響的形態と考へたことにたいして、ジョーンズはそれを、第一に、土地所有が生産を、したがって社會を支配する關係でなくなったときに、第二に、農業そのものが資本制的に營まれるときにはじめてあらわれてくる土地所有の形態として把握している。また労働基金の形態からみた資本主義社會を、それが『收入から貯蓄され、利潤の目的をもつて賃銀を前拂いされるのに使われる富、すなわち資本』としてあらわれること、いいかえれば、労働者の生活資料は、それが賃労働として對立するとき、資本の形態をとつてあらわれることを正しく把握した。

ジョーンズのリカード批判の第二の點についていえば、それはリカードの分配論の基本構造となつている(1)收穫遞減法則、(2)勞賃・利潤相反關係の批判——補助資本と維持資本の區別、——および(3)のちに賃銀鐵則とよばれるリカードのマルサス的人口法則およびそれらの諸理論の歸結としての(4)利潤率低下傾向法則の批判にむけられている。しかしわれわれは、ジョーンズのリカ

ード批判の個々の詳細にたちいる¹¹⁾ことなく、前節で明らかにした諸國民の經濟學の課題にこたえるジョーンズの基本的な理論はなんであったかを直接明らかにし、そのなかで、リカードにたいする批判がどのような理論によっておこなわれているかをみよう。イギリスの古典派經濟學はスミスから出發し、ジョーンズの前世代において、すでにリカードとマルサスの二つの分裂せる理論をもっていたが、ジョーンズは一言でいえばこのスミス——マルサスの『富』の理論をうけつぎ、前資本主義的經濟構造において地代の發生をフィジオクラートの見解から自然の剩餘としてとらえた。このように地代をマルサスと同じく『神の賜物』に歸したジョーンズはこの觀點から前資本主義的經濟構造における地主と『労働者』である農民との利害の一致を結論する。そして資本主義的經濟構造における使用價值量が豊富になることをもって、地主、資本家、労働者の利害がまったく調和するという理論をうちたて、同じスミスから出發したリカードの『價值』の理論に對立し、それを批判したのである。これが『諸國民の經濟學』の基本的な理論であったように思われる。

ジョーンズが、リカードの地代論がイギリス統計史の示す事實、すなわち農業人口が總人口に占める比重の減少を、リカードの學説は説明しえないとし、リカードの地代論の基礎にある收穫遞減の法則を否定し、同一の土地における資本量の増加が生産物量の増加をともなうならば、地代率の低下にもかかわらず總地代量は増加するという差額地代の第二形態を明らかにした點では正しかった。しかしジョーンズが、餘剩利潤の一形態としての資本制地代の増進を單に單位面積當りの生産物量の増加に歸して、リカードを批判したのは、かれの基本的理論にもとづくものであるとみななければならないであろう。(リカード批判の第一點)

スミスの生産の理論を踏襲したジョーンズによ

れば、労働生産力の増進は三つの要因、すなわち、労働の繼續性、知識と熟練および機械力によって決定されるが、前資本主義的經濟構造においては農業も工業もこれを欠いている。すなわち農民は、長い休閑期によって作業を中斷され、知識と熟練に乏しく、機械力の利用は思いもよらない。また手工業者、職人などについても同じ事情が存在する。したがって労働基金の大きさもまた小さい。しかるに資本はこの缺陷を克服して生産力を高めるので、労働基金としての資本はいちじるしく大きくなる。また二つの經濟構造の區別のうえにたつジョーンズの人口論によれば、『賃銀』の騰落と人口數の増減とのあいだに作用する主要な事情は、『賃銀』の形態と『賃銀』の變化がおこなわれる時間の長さであるが、『賃銀』の形態が實物であり、また豊凶によってその額が急激に變化する前資本主義的經濟構造においては、マルサス的な人口法則が作用する可能性が大きく、したがって『賃銀』も少額とならざるをえない。しかし資本主義的經濟構造においては、『賃銀』は貨幣形態をとり、その變化も長期にわたって徐々におこなわれるから、もし労働者階級が『自發的抑制』をおこなうならば、労働基金としての資本の飛躍的増大とあいまって、賃銀は高額を維持すると結論している。(リカード批判の第三點)

このように『諸國民の經濟學』は、地代・労働基金・人口の理論から、資本主義的經濟構造における生産物量の増大をもつて、そのわけまえたる地代・利潤・賃銀の増大と考え、これによって地主、資本家、労働者の三階級の利害の一致を結論しているのである。そして最後に、ジョーンズは社會諸階級の政治的諸關係の分析において、前資本主義的經濟構造においては土地所有を基礎とする支配・隷屬の政治體制がとられることが通例であるが、資本主義的經濟構造においては、資本、労働の移轉の自由とともに、政治的自由をあたえなければならないことの必然性を明らかにし、労働階級の政治への参加を不可避としている。労働階級はその自由を、自發的抑制によって人口數を制限し、生活水準を改善するために行すべきことを説いている資本家階級は地主と労働者のあい

11) これについての文獻には、末永茂喜『古典派經濟學』1948年所收のジョーンズについての二つの論文、玉野井芳郎『農業における資本蓄積』(經濟學論集1947年16巻1號)および『労働フォンドに関するリチャード・ジョーンズの學説』(社會科學紀要1952年第1集)を参照のこと。

だにたつて、封建的地主の生産における役割を代って演ずることを認めるとともに、消費生活においても貴族である大土地所有者より低いその水準は、労働階級がその生活を向上させようとする場合の刺戟をあたえるものであるという理由から資本家階級の存在の必要性を認めている。そして資本家階級はこの点においても地主と労働者を結ぶ環としての役割をはたすことを示すことによって『諸國民の経済學』の任務を終っているとみることができよう。

總じて資本主義社會のジョーンズの分析はいちじるしく迫力を欠き、かれは利潤がどこから得られるかを明らかにせず、單に資本の蓄積の進行とともに労働者の状態が改善されるというにとどまっている。もとよりジョーンズは、資本主義社會において生産物の價格は賃銀・利潤・地代に分解されることを知っている。しかしかれは労働者を維持する維持資本と區別される補助資本の導入の契機を、生産物價格、總資本にたいする利潤率を一定とし、年々回収さるべき補助資本の價值を回収するためにはどれだけの生産物量が必要であるかという形でしか求めていない。そして維持資本が年々全額回収されなければならないのにたいして、補助資本は年々の消耗額を回収すれば足りるから補助資本が用いられるに至るといふ回答をあたえているにとどまる。私が生産物量=使用價值量視點が、ジョーンズの學說のなかに一貫しているとみるのは、あえて誤解ではないであろう。したがって、かれにおいて不變資本として労働者に對立すべき補助資本は、労働者を援助すべき道具と化し兩者のあいだの對立關係がみおとされる。

したがってジョーンズの補助資本という概念も、リカードを克服することができなかつたとみるべきであろう。(リカード批判の第三點)最後に、リカードの利潤率低下傾向法則の批判もなんら新らたなものはい生まれない。ジョーンズは、リカードのいうように資本の蓄積は利潤率に依存するという考え方を否定しないで利潤量に依存するという觀點を對立させ、利潤率の低いことが資本蓄積の急速な徵候であるとしている。(リカード批判の第五點)このようにみれば、ジョーンズの

基本理論はますます明らかとなるであろう。かれのリカード批判のなかで生きるべき點は、リカードのマルサスの側面、すなわち收穫遞減法則と人口法則の側面の批判のみであり、リカードが確立した原理は、それらと無縁であったことは説明を要しないであろう。

このような『諸國民の経済學』の理論からは、當時ようやく本格的に十年の周期をもって開始された恐慌はまったく問題とならず、『諸國民の経済學』がこれについて、まったくふれていないことは、けっして偶然なことではない。

V

以上がおおよそ『諸國民の経済學』の基本的な理論の大要である。経済學の問題提起とその方法においてマルクスにもっとも近くにたつジョーンズが理論的にマルクスとまったく逆の歸結に導かれた全秘密はまったくここに横たわっている。この點はジョーンズの基本的視角とも關連する重要點であるので、われわれは、ややたちいて説明しなければならない。

元來、ジョーンズはすでに述べたように、イギリス古典派經濟學者のなかにあつて、はじめて資本を關係として、すなわち生活資料および労働の諸條件が賃労働と對立するとき、それらが資本の形態をとることを明確に規定したのであるから、かれがみずからの分析を、生産物が使用價值と交換價值の統一物としてあらわれる商品の分析から、はじめなかつたのはなぜかと問うことがゆるさるよう。それは、ジョーンズが分析の發端においたその當時の世界の大部分を占める小農民の收入、すなわちジョーンズのいうかれらの賃銀はほとんど生産者であるかれら自身によって直接消費され、交換過程にはいりこまないためであつた¹²⁾。このような價值使用量としての『賃銀』が、資本主義

12)この隠された視點は、經濟學を交換科學 Catalactics 化しようする傾向に反對して『しかし、生産者によつて消費され、交換という題目にならない財貨が多いこと、それゆえ諸國民の富の一部が、政治經濟學を交換の研究にかぎろうとする人々の觀察から除外される』(Whewell-Jones: op. cit, p. 196.) と述べたところから明らかに看取されるであろう。

社會において、いかに變化するかというのが、彼の基本的な視角となつたのであつた。この結果、資本主義社會分析の正しい視角、資本主義的生産が價值増殖過程、ないしは剩餘價値の生産が目的であること、そのような社會においては、生産物は單なる使用價値としてではなく、交換價値の形態をとらざるをえないことが見失われ、不變資本として對立すべき補助資本は、労働の生産力を高める單なる道具と化し、資本の生産力が労働の生産力と誤って理解されることになる。さらに重要なことは、このような生産物量＝使用價値量という基本的な視角に制約されて、經濟發展の正しい把握がさまたげられることである。ジョーンズの經濟發展觀はつぎのごとく要約できるであろう。すなわち第一に、諸國民の經濟發展は單なる生成、すなわち量的な擴大としてあらわれ、すべてがなめらかに調和的に進行するものとして考えられてくる。ジョーンズにおいて階級的對立の基礎が明瞭に否定され、前資本主義的經濟構造から資本主義的經濟への轉化の原因と合法則性への理解が充分あたえられていないのはこのためである。このような發展觀からは、第二に、運動の源泉、原因の起動力を説明することができないから、事物の運動を事物の外部からひきおこされると解する。ジョーンズにおいて經濟の發展が、緩漫な・長い過程としてあらわれ、そして經濟的進歩の究極の原因が、神の攝理としてあらわれるのは、このためである。

このようにみてくると、從來の諸研究またはジョーンズの學說についての評價が、いずれも多かれ少かれ、ジョーンズの學說の一面の強調にとどまっていることが明らかとなるであろう。ジョーンズの著作にふくまれる歴史資料的價値を高く評

價する見解は¹³⁾、しばらくおくとしても、われわれがイングラムにならって、ジョーンズの學說を、リカード體系に對する『最も初期の・そして最も體系的な批判¹⁴⁾』というときのジョーンズの體系とは、すでに述べたような使用價値量觀點を示すものといわなければならない。またわれわれは、マルクスの遺稿『剩餘價値學說史』Theorien über den Mehrwert を編集したカウツキーのようにジョーンズの學說を『資本家的生産方法の經濟的總過程としてのブルジョア經濟學の終極を示すもの¹⁶⁾』とみることはできないであろう。ジョーンズの經濟發展觀を明らかにしたわれわれはまたジョーンズが資本主義社會の歴史的性質を、進んでその止場性をも、すなわちその下に横たわっている矛盾を解決しつつ歴史的には必然的に過ぎさつてゆくという點を、かれの學說の眞髓であるとみることにはできない。そのような思想はそれ自體きわめて貴重であり、ジョーンズが事實表明したものであるが¹⁶⁾、それはかれの理論の必然的な歸結ではなく、むしろチャーティズム運動の激しい動きをまえにした支配階級の不安を示したものとみるべきであろう。

15) 詳細には、Kautsky はつぎのように述べている。『リチャード・ジョーンズに至って、ブルジョア經濟學は、資本家的生産方法の經濟的總過程の理論として、すなわちこの生産方法を正當づけようとするならわれたる試みとしてではなく、これを把握しようとする捉われざる努力としては、實にその終極に達している。歴史的にも論理的にもブルジョア經濟學はこの頂點を越えることができない。……この經濟學は、それがブルジョア社會の土臺の上にとどまっているあいだは、一つの歴史的カテゴリーとして資本家的生産方法にたいするジョーンズの認識以上にできることはない。』(Karl Marx: ebenda, Vorrede, XI—XII.)

16) 『労働者と蓄積された資本の所有者とが同一人に歸するような事態が將來存在するかもしれないし、また世界のいくつかの部分ではその事態に近づきつつあるかもしれない。Jones: Text-book, p. 73)

13) A. Blanqui: Histoire de l'économie politique en Europe 3^e éd., 1. Bd., Paris 1845. p. 382.

14) J. K. Ingram: op, cit, p. 139.